



かしま

ほっと
HOT
ほっと
hot

通信

7月号 Vol.354

令和4年(2022年)7月1日発行

■編集/かしま病院広報企画室
■発行/社団法人 養生会

〒971-8143
福島県いわき市鹿島町下蔵持字中沢目22-1
tel.0246-58-8010(代) fax.0246-58-8088

ご意見・ご感想は...
上記住所へ郵便、またはE-mailでお送り下さい。
かしま病院広報企画室まで
kouhou@kashima.jp

ホームページ <https://www.kashima.jp>

かしま病院

検索



スマートフォンをご利用の方は、
QRコードを読み取り、アクセスしてください。
PCサイトと同じ内容がご覧頂けます。



1
2

巻頭特集

「いとちプロジェクト」はじめました。
～病院から外にでて、地域ともっとつながる～

3

糖尿病のおはなし
『使用済み針の処分について』
かしま糖尿病サポートチーム

コラム ひんがら目(181)
『恩師新田澄郎先生の思い出』
呼吸器科 部長 山根 喜男

4

ようこそ家庭医療へ!
リハビリPOST
新任医師のご紹介
かしま荘通信

看護学生 Internship

インターンシップ 開催!!

参加者
募集!!

かしま病院の看護を体験してみませんか?

日時 第1回 2022年 8月17日(水) 9:00～12:15
★締切: 8/10(水) まで

第2回 2022年 9月1日(木) 9:00～12:15
★締切: 8/25(木) まで

定員 各日6名 (定員を超えた場合は、先着順とさせていただきます)

スロプログラム

- ・病院概要説明
- ・職場体験

申し込み方法

当院ホームページのインターンシップエントリー
フォームより、必要事項を入力しお申込みくだ
さい。



※新型コロナウイルス感染症の状況によりプログラムの変更や開催を中止させていただく場合がございます。

ご不明な点やご質問などがございましたら、お問い合わせください。
看護部インターンシップ担当 TEL:0246-58-8010

巻頭特集

「いとちプロジェクト」はじめました。

～病院から外にでて、地域ともっとつながる～



「いとち」とは?

いとち、というのは、文字通
り「医」と「地」のことを指しま
す。医療と地域が関われる余白
(場所)を地域に増やすことで、
両者の対話の機会を作り、医療と
地域は、本来どのような関係を作
ろうとしてきたのか、医療と地域
は、どんな豊かな関係を作れるの
か、さまざまな取り組みを通じ

で、みんなで楽しく考えていこう
じゃないか、という想いが込めら
れています。いとちプロジェクト
の拠点は、かしま病院から徒歩5
分程度の場所であり、3年前まで
有料老人ホーム「かしまホー
ム」として利用していた建物を再
利用しています。



かしま病院では、今年4月に「かしま病
院地域とつながるプロジェクト」を発
足し、6月より「いとち」というプロジェク
トに進化いたしました。医療を全面に出した
プロジェクトではなく、地域交流がテーマと
なります。今回は、かしま病院開設40年を目
前とした年に初めての取組となる「いとちプ
ロジェクト」を特集いたします。

いとし 一緒にやろうとしていること

- 医療と地域の担い手による対話の場「いとちかいぎ」
- かしまホームのリノベーション+コミュニティ化
- 医学生をはじめ、若い世代の学びの場
- 地域の皆さんへ向けた健康を支える場づくり
- 興味がある分野について、逆に地域の皆さんから教えて頂く場
- 地元の人との井戸端会議の場

医療面にこだわらず、なんでもあり

いとちプロジェクトはこれまでのコロナ禍の経験や学びを踏まえ、病院の近隣に、病院が提供するもう一つの場所を作りました。

地域住民、学生さん、行政の方、医療関係者から介護・福祉関係者など、肩書不要の1人の人間として、誰もが自然体で、みんなで集まれて、ワイワイ・ガヤガヤする時もある、シーンと静かにしじみすることもできる、なんでもありの、人と人が良い関係性を作れる空間にします。将来的には、日本国内の同じ想いを持つ地域の方から、注目される「いとち」を目指していきます。

50代)です。医療関係者だけではなく、いわき市のことを長く知り、地域の活性化や執筆活動などで活躍している、地域活動家2人(ヘキレキ舎)との合同チームです。



いとちプロジェクト代表はかしま病院職員でもあり、鹿島の住民でもある江坂亮が務めます。スタート時のメンバーは計8名の幅広い世代でのメンバー構成(20代

私たちがやろうとしていること

いとちが目指すもの

いとちプロジェクトをスタートした背景には、やはり新型コロナウイルス感染症の流行が挙げられます。社会的に外出や人のつながりが制限され、コロナ禍の閉塞的なストレスに対し、個人の忍耐力が求められました。感染者数が都市部より少ない、いわき市では緊急事態宣言などの制限により、もともと地方は人が少ないため社会的な孤独・孤立が増加し、高齢者のうつも増加しました。

また高齢者だけではなく、医療機関で働くスタッフも感染予防対策の徹底を継続しながら感染者対応など非日常的な業務が求められる一方で、外での食事会など交流の機会を失い、ざつばらんに笑いながら楽しみながら病院職員同士が会話する機会も少なくなりました。

いとし 活動紹介

DIY

「いとちの立て看板とベンチが欲しい!」

そうは言っても作り方も何も分からないと言うことで、中之作プロジェクトの清航館さんにおじゃまして DIY 教室を開いていただいた様子です。

次は作ったベンチと看板の塗装と、かしまホームの外に置く作業台兼会議テーブルの DIY に取りかかりたい!



いとちかいぎ

自分が考える医療とは何か?地元とは何か?理想の医療とは何か?をグループごとに分かれて対話を行いました。

行政職員や個人事業主、区長さんなど地域の多様な影響力のある皆さんと、現役の医師、研修医、医学生、さらには病院の事務職員たちが熱を持って対話しました。



いとちfacebookはこちらのQRから。



糖尿病のおはなし かしま糖尿病サポートチーム



使用済み針の処分について



今 回はインスリン自己注射や自己血糖測定後の針の処分についてお話ししたいと思います。

当院には、糖尿病の患者さんが日々多くご来院されています。糖尿病の患者さんの中にはインスリンの注射をご自身で打たれる方や血糖を自己測定される方もいるので、針が在宅医療廃棄物として出ているかと思ひます。そこで問題となってくるのが、使用済み針の処分方法です。そのままゴミ箱や野外に捨てるのが NG であることはご存じかと思ひますが、再度ご確認ください。

在宅医療廃棄物とは、医療行為に關して出される廃棄物で廃棄物処理法上の区分では「感染性廃棄物」といい、「特別管理廃棄物」に区分されます。病院外で出た医療系の廃棄物（使用済み注射針）の捨て方は、針ケース付きで廃棄することが原則となっています。散逸・破損防止のためプラスチックの容器やペットボトルの空容器に入れて病院やクリニック、調剤薬局へご持参のうえ、処分していただくようお願いいたします。また自宅内で保管される際は、小さいお子さんや認知機能低下がみられるかたが誤って飲み込むなど、予期せぬ事故につながることもありますので十分ご注意ください。

外出先での使用済み針の不適切な廃棄やバーベキュー時など野外で使用した時の『ポイ捨て』は、飲食店などの従業員さんやお掃除のかた、ゴミ収集時や資源物の選別作業をするかたの針刺し事故の原因となっています。

刺し傷になるだけでなく、そこから血液を介してウイルス病原体の感染を生じる事故も多発しています。使用済みの注射針や期限が切れ残り残ってしまったお薬は、安全な処分が必要となります。最近では新型コロナウイルスの流行もあり、感染拡大防止のためにも正しい処分の仕方が求められています。いま一度、ご確認いただき周知いただければ幸いです。

当院でも糖尿病教育の一貫として、「サラヤ針捨てボックス 1 個 100 円（税込み）」を検査科にて準備しております。購入可能ですのでご希望の方はお申し出ください。

これからジメジメとした梅雨が来て暑い夏が来ることで体調が不安定な時季になると思ひます。どうぞお身体ご自愛くださいますよう、よろしくお願いいたします。

かしま糖尿病サポートチーム
看護部 早瀬 美和子



恩師新田澄郎先生の思い出

わが恩師、新田澄郎先生が逝かれました。享年86歳でした。

恩生は、昭和51年に大学院生として東北大学抗酸菌病研究所（現加齢医学研究所）に入局しましたが、そのときの研究室（4研）のボスが、新田先生でした。呼吸生理学、特に肺循環を専門とする研究室でして、恩生に与えられたテーマが魚の鰓呼吸でした。えらいテーマでして、何から手をつけてよいかわからず、結局は目的を果たせず、テーマを変更し広範囲肺切除における肺循環動態で学位論文を取りました。

大学院生時代には仙台厚生病院外科で臨床を行い、毎月1回土日には新田先生の出身地の宮城県北部に位置する登米郡米谷町の公立米谷病院の当直に通いました。先生は町では知らない人はいないくらいの名士でした。

新田先生が東北大学助教授から、心臓移植で有名な和田寿郎教授の後任として東京女子医科大学外科の主任教授に栄転されたのが昭和62年頃でして、恩生が共立病院に赴任した時期と重なりました。

当時、肺腫瘍の温熱療法が女子医大の横山正義教授を中心に行われていましたが、温熱療法を希望された共立病院の肺腫瘍患者さんを新田教授に紹介したのが思ひ出されます。着任早々でしたが、丁寧に治療をしていただきました。先生には、呼吸器関係の学会でお会いするたびにいろいろ励ましの言葉を頂きました。

女子医大を退官されてからは、湘南の病院や、山梨県の市民病院の院長などを歴任

されました。

恩生が、呼吸器外科学会誌の巻頭言に、「呼吸器内科医を演じています。……」と駄文を書いたところ、先生の目に留まり、早速感想文を送ってこられました。恩生が呼吸器外科医をやめて、かしま病院で呼吸器内科医になってしまったことを悲しんでおられたようです。「演じて……」という文に哀愁を感じられたのかも知れません。抗酸菌病研究所時代、若い医局員を相手に囲碁将棋や麻雀によく付き合っていたと聞きました。先生の将棋を傍で観戦していたときのことです。窮地に立たされていた先生が、一手で形勢を逆転させました。すごいなーと驚きましたが、実は角筋を誤魔化して敵の駒を取っていたと解ったのは勝負が終ったからでした。

クイズ好きの先生は、「洗濯しないでパンツ1枚を履き替える」と何日持つか、「傘を差さないで雨の中を移動する場合、ゆっくりなら雨脚は弱いが、急げば急ぐほど雨脚は強くなる。走ったときと歩くときではどちらがずぶぬれになりやすいか？」などの問題を出されました。

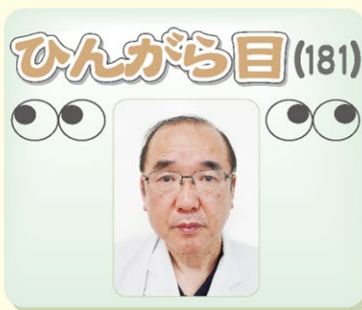
雨脚の問題は長年熟考して来ましたが、30年くらい経過してから、医師会報に解答を投稿しました。文末に、「問題を出された新田先生、これでよろしいでしょうか」と書きました。

いつかはその原稿を新田先生に送り届けようと思ひていましたが、実行する前に鬼籍に入られてしまいました。

敬愛する新田澄郎先生
大変お世話になりました
安らかに休みください。

合掌

（呼吸器科部長 山根喜男）



ひんがら目 (181)

ようこそ 家庭医療へ!

第149回

第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会



～ いわきに生きる家庭医育成への挑戦 ～

診療部 石井 敦



2022年6月11日・12日、第13回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会が「今、プライマリ・ケアの真の価値を考える～さまざまな立場・環境をつないで～」をテーマに、パシフィコ横浜を会場に、初めて現地とオンラインのハイブリットで開催されました。3年ぶりに現地参加することができ、リアルな会場のライブ感を体験して来ました。

昨今のコロナ禍における感染対策、発熱外来やコロナ患者さんへの対応や地域での施策において、改めてかかりつけ医やプライマリ・ケアの重要性は再認識され、期待と共に責任ある対応も求められるようになりました。プライマリ・ケアの現場には、家庭医や病院総合診療医、そして医師のみでなく、看護師や薬剤師、歯科医師など、実にさまざまな立場や環境で働く方々がいます。立場や職種による垣根をこえて、まさに今、プライマリ・ケアの真の価値とは何か?を考え、よりよい社会づくりに貢献できるよう、行動を加速する好機だと思います。

日々同じ分野で活動している仲間に出会えるのは、単純に嬉しいものです。数多の久々の再開を果たし、現地参加された方の多くが、日々楽しみながら新たな試みをしている仲間の熱量を肌で

感じたことでしょう。

今大会における登壇者の発言や参加者の立ち振る舞いを通して私が強く感じたことは、とにかく、人々のwell-being(病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること)のために日々汗水流して働くことができ、それを実現するための修練に貪欲な人々たちであることです。多様性を認め、個々のニーズに対応するためには決まりきったマニュアルだけでは不十分ですので、まさに「毎日がspecial」な対応が求められます。日々飽きることなく、職人として生涯修練を続けることができる楽しくてやりがいのあるお仕事に巡り逢えた幸せな人たちの集団ともいえます。

ところで、伝統的な医学専門18領域の関連学会の理事は、ほとんど年配の男性で占められているそうです。それと比較して、日本プライマリ・ケア連合学会の理事は、年齢層や男女比が圧倒的にばらけています。学会そのものの歴史が浅いという理由もあるでしょうが、今求められている多様性への垣根を超えた取り組みを推進するのにふさわしい団体といえるかもしれません。

かしま病院では、2008年度から家庭医を志す研修医や地域医療実習を行う医学生を受け入れています。このコラムを担当する医師の石井敦は日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医として、研修医・医学生の指導を行っています。



第136回

転倒後に起こりうること

すると外傷や骨折が発生し、筋力や体力・バランス能力が低下します。そして、その後の生活に支障をきたすため、再度転倒するという悪循環に陥りやすくなります。

転倒がもたらす弊害として「骨折」→「転倒後症候群」→「要介護状態」という流れがあります。転倒により骨折しやすい部位としては、肩や手首、股関節や背骨(特に胸や腰)の骨折です。骨折の治療は長期間掛かるため、筋力や体力の低下が繰り返さ

今回は、転倒した後に起こりうる弊害についてお話していきます。まず、転倒とは「本人の意思からではなく不注意で地面(同一平面)または低い面に体が倒れる事」とされています。転倒する

す。また、入院生活は認知機能も低下しやすいため、骨折前の生活に戻れなくなる可能性が非常に高くなります。次に、転倒後症候群とは「転倒後に激しい転倒恐怖感を示し自立歩行が可能であるにも関わらず歩行障害をきたす症状」のことを言います。この症候群が続くと活動が制限されてしまうため、QOL(生活の質)が低下することになります。以上のような骨折や転倒後症候群により、結局は介護が必要になる。つまり「要介護状態」となってしまいかも说不定です。

転倒は、本人だけでなく、その家族の今後の生活に大きな影響を与えるため、まずは転倒を予防する事が大切です。今回は転倒の予防や対策についてお話していきます。

作業療法士 松尾ゆうか



かしま荘通信

誕生祝いのティータイム

6月10日(金)



6月誕生者の入居者様が集まり、誕生祝いのティータイムを行いました。皆様とても良い笑顔で、美味しそうにケーキを食べる様子が見られたり、コーヒーを飲みながら世間話にも花が咲き、皆さま楽しい時間を過ごされておりました。誕生日を迎えられた皆様、おめでとうございます。



新任医師のご紹介

総合診療科 白土 正人(しらど まさと)



初めまして。この6月より総合診療科で勉強させて頂く、白土正人と申します。出身は桜で有名な双葉郡の夜の森です。木造建ての平駅前に六段の調が優雅に流れていた頃、叔父のお見舞に訪れたのが、かしま病院でした。文枝先生曰く「かしま病院創設は今から30年前よ...老いるって怖い、こんな私ですが、宜しくお願いします。」

